

優秀賞

祖父の手

静岡県立大学短期大学部2年 服部 蘭

私は日頃から失敗が多い。そんな私が一番後悔し、学んだ失敗について述べていきたい。

二年前の冬に突然「祖父が病院に運ばれ、体調が良くない」と民生委員の方から電話があった。私の父は祖父と不仲であり、日頃から「祖父はすぐ怒る怖い人で、私達と会いたがっていない」と言っていた。そのため、私と祖父は九年もの間会っていないかった。

次の日、私と兄で恐る恐る病室を訪れるとげっそりと痩せ、寝たきりとなった祖父の姿があった。不思議な気分になるとともに、ずっと会いに行けなかったことに怒られることを危惧していた。だが祖父は呼吸器の奥から「会いたかった、大きくなったなあ。」と言った。涙が出そうになった。祖父はステージ4の癌で余命は一ヶ月と言われた。その後、祖父の家を訪れると人が住んでいたとは思えない程の状態になっていた。荒れ果てた庭、大量の通販商品があり、中には私と遊ぶために用意したであろうオモチャも沢山あった。毎週、祖父の家に通い掃除をするうちに、なぜもつと早くこうすることが出来なかったのだろうと何度も思った。

祖父の病態はみるみる悪化し、最期を迎えようとしていた。頑固な祖父は度々体から管を抜いてしまうため、手袋をはめられていた。その手で祖父は私の顔に触れ「かわいいなあ。お前はかわいい。今までも出来なくてゴメンな。こんなものが無ければ直接触れるのにな。」と言い、私は涙が溢れた。もつと早く会いにいけない良かった。そうすれば、もつと触れ合ったり、旅行に行ったり出来たのに。通販の人なんかじゃなくて、私が話し相手になることだって出来たのに。私のことをずつと想ってくれていた祖父に早く会いに行かなかった後悔が込み上げてきた。しかし、その人がいなくなってしまうからでは遅い、近くににいるうちに大切にしなければ意味がないと強く感じた。今、周りにいてくれる人を大切にして、気持ちいを伝え合っていきたい。